

第〇1講 「品詞」「文。」のルール」「語句節」「動詞の活用」概論

ようこそ論理英文法の世界へ！

本書を開いたこの日こそが英語のできる人材になる転機（転換点）です
英語を得意科目にして、英語論文が読める書ける、外国人と対等に渡り合える、そんな有用な人材になるぞという気概で、最後まで諦めず読破する覚悟で臨んでください

単なる例文の羅列や統一性のない場当たりの説明に過ぎない騙りものの現行英文法という災厄から脱却し、騙り英文法・マガイモノに騙されて明るい有望な未来をつぶされないようにしましょう

本稿は、全く新しい論理的体系的な英文法を学び、辞書さえあればスラスラ読める英文読解力を付け、次に辞書さえあればサクサク書ける英作文力を付け、さらには、英作文の時間を短縮し話せるようにし、読解力・発信力を身に付ける基盤となる科学的英文法を提示します（リスニングは体育・音楽のような別科目と考えてください）
「英文法力⇒英文読解力⇒英作文力⇒英語を話す力（読める→書ける→話せる）」という流れを脳内に創りましょう

本稿の英文法体系は、化学のように、言語現象の論理体系化を目指したもので、理系のための英文法解説書ともいえるものです
宇宙の物質や現象を論理的に探究し説明するのが化学ですが、人間の言葉も「宇宙の中の現象」ですから、全て完全論理で説明できるのです
周期表のように、ほとんどの項目を表にできるのです
ここに、文系の感情論の騙り英文法ではなく、「論理英文法」を顕現提示します

文系の英語力保持は当然（常識的最低素養）ながら、理系こそ、英文法力をもとに、英語論文をスラスラ読み情報を得て、英語論文をサクサク書き成果を発信できる語学に秀でた研究者・技術者をめざしましょう（最近のノーベル賞受賞者の方々が異口同音に英語力をつけなければならないと言っているのをご存じでしょう）

なお、本稿は、自由頒布版です

英語に困っている方・英語に頑張りたい方々等々に広めてあげてください

（中学生・高校生・大学受験生・大学生・大学院生・社会人等の多くの方々に読んでいただきたいものです）

2015年3月改訂版

本講では、言語（英語）の構造について、まずは理解しておきたい事項の概説をします
次講以降の理解の基盤となるものですので、完全理解と完全暗記をお願いします

I 「単語と品詞」

『文。』を「構成」している「単語」は、その「性格（質）」によって、いくつかの種類・グループに分類されています

分類された個々のグループ名としては、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」「副詞」等があります（まずは、この5品目を完全理解です）

これらのグループの総称を「品詞」というのです

本書では、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」「副詞」を「名形自他副」等と略します

- ①、まずは、「品詞」のうち、「名詞」と「形容詞」を確実に「認識」してください
- ②、次に、「動作」をあらわす「単語」である「動詞」は、「自動詞」と「他動詞」に、常にきっちり分けて考えるようにしなければなりません（「厳格区別」です）
- ③、その後、ハブカレモノの「副詞」の理解に入ります

本書では、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」が、『文。』を「構成」する「基本的な品詞」なので、「基本4品詞」「構成4品詞」と位置づけて進行します
ちなみに、「副詞」は「部外者的な品詞」です（常にハブいてやりましょう）

ちよいと、老婆心・・・すんません

理系、研究者・技術者は、アイディアが大事と言われています

そのアイディアのどこからくるのでしょうか

夢で見たという科学者もいますね

まあ、それはそれとして、多くの研究者・技術者にその夢を見てもらいたいのですが、どうすれば、アイディアが豊富に湧いてくるのでしょうか

多数、要因はあるでしょうが、本稿では、楽に「古文」「漢文」に親しんでもらうということを提案します（「古文」「漢文」が楽勝になれば、大学受験も楽勝！）

論理英文法の体得により、外国語のような「古文」「漢文」に簡単に多く接し、理系の方々にも文系の素養を身に付けてもらい、発想の豊かな理系人になっていただければと思います

ここを深く認識せずに、笑い流すと、破綻が待ってます

「単語と品詞」の基本事項（「基本4品詞」）

「名詞」

『文。』の中心的な位置（「主体・主語」や「客体・目的語」）につく「単語」・「品詞」で、「モノやコトの名称」をあらわします（主に、世の「現事象」の「主体」か「客体」となる）

「形容詞」

「名詞」を「修飾」したり、「名詞」の「状態」を「説明」したりする「単語」・「品詞」です（「名詞」を直接修飾する場合と「主語」たる「名詞」を「述語」として説明する場合の2仕様ある）

「自動詞」

『文。』の主題に位置する「名詞」（「主体・主語」）の「動作」のうち、「他者」を巻き込まない、「主体」単独の「動作」をあらわします

「他動詞」

「主体」の「動作」のうち、「他者（客体）」を「巻き込む動作」をあらわします

以上が、『文。』の「基本4品詞」、「構成4品詞」です

「名詞」が本当にわかること（第07講の講末参照）と「形容詞」の認識・理解と、「自動詞」と「他動詞」をしっかりと分ける態度が、最初の関門です

「品詞」に対する本当の認識・理解がないと、「単語」もなかなか頭に入らず、暗記も非効率です

「品詞」の理解があれば、「単語の役割」を考えながら記憶できるので定着が違います（「品詞」を認識・意識して単語は覚えるべし！）

ここで、いったん仲間外れにしなければならない「副詞」について言及しておきます

「副詞」

- ① 「動詞」「形容詞」「副詞」「文全体」を修飾し、
 - ② 「時」「場所」「程度」「頻度」「目的」「手段」「理由」「条件」「譲歩」「否定」「付帯状況」「結果」等を表す
- 『文。』の骨格をなすものではなく、場面状況を表す舞台背景的要素です

人間が、高度に何か（世の現事象）を言い表し書き表す場合には、『文。』を使います
そして、『文。』には、5種の動詞が支配するルールがあります（いわゆる「5文型」）

一方、「演劇」には、「監督」「役者（主役・脇役）」「衣装」「（舞台）背景」等があります（作文者・話者がプロデューサーです）

『文。』も同様に、①〈主語〉が「主役」で、②「動詞」が〈影の支配者的役柄の役者兼「監督」〉です（〈主語〉というのは狭小矮小なので、本書では「主役」と呼びます）

「主役」を補佐する「脇役」もありますね

これが、③「主役」を説明する「補（佐）役」です（従来は、狭小矮小的に〈補語〉といわれていましたが、本書では、「補役」と呼びます）

「補役」が登場する場合は、ライバルや相手役が登場しない「一人芝居」なので、「主役」を説明するための「自動詞」という「役者兼監督」が演出指揮します

それから、「主役」のライバル役（敵役）・相手役が登場する場合もありますね

この相手役は、『文。』では、④動作の対象であり、「目的役」と本書では呼びます
ここでは、他者他物に働きかける「他動詞」という「役者兼監督」が演出指揮します

ここまでが、『文。』の「基本的な構成要素」です

①「主役」②「自動詞」「他動詞」③「補役」④「目的役」です

そのほかに、⑤「衣装」と、⑥「（舞台）背景」があります

すなわち、『文。』では、⑤「名詞修飾」の「形容詞」であり、⑥「場面状況」をあらわす「副詞」です（⑤⑥は「構成要素」ではありません）

なんといっても、⑤と⑥は、「付属的な要素」であるということを認識理解することが重要です

主役 〈＋名詞修飾形容詞〉	自動詞	補役 〈＋名詞修飾形容詞〉
	他動詞	目的役 〈＋名詞修飾形容詞〉
富リ言司		

III

「3種の言葉の単位」

「名詞」「形容詞」「副詞」には、小中大の3種の形態があります

小型が「語」、中型が「句」、大型が「節」です

「句」「節」の存在理由は、人間の思考や表現の発達発展に単語の数や造語のスピードが追い付かなかつたり、高度な内容を表現しなければならなくなったからでしょう
ここでは、「語」とは「1語のもの」をいい、「句」とは「2語以上の集合体（のうち、文の形態を含まないもの）」であり、主に「成句詞（前置詞）」を使って中型の「形容詞」「副詞」をつくります（「成句詞（前置詞）」は道具であり手段の「詞」です）

「節」とは「文そのものを名詞化・形容詞化・副詞化したもの（大型の名形副）」という程度の理解をここではしておいてください（詳しくは第6講以下と第22・23講）

「品詞」と「言葉の形態3種」のまとめ

「品詞」と「語句節」		「詞」の形態		
		（単）語	句	節
品詞 の種類	名詞	①名語	②名句	③名節
	形容詞	④形容語	⑤形容句	⑥形容節
	副詞	⑦副語	⑧副句	⑨副節

英語の例を挙げておきます

- ①「boy」②「a tall boy」③「that he is a teacher」
- ④「pretty」⑤「in trouble」⑥「関係代名詞 + she met」
- ⑦「yesterday」⑧「in the morning」⑨「when they went to Tokyo」

「品詞」のまとめ

総称	品詞称	各称	役割
「品詞」	「名詞」	「名語」	「主目補」になる
		「名句」	
		「名節」	
	「形容詞」	「形容語」	①「補役」になる
		「形容句」	②「名詞修飾形容詞」になる
		「形容節」	「名詞修飾形容詞」になる
	「副詞」	「副語」	「場面状況」を設定する 「役外状況族」
		「副句」	
		「副節」	

IV

「動詞」は活用して名形副化する！

日本語の動詞は、「未然・連用・終始・連体・假定・命令」と「活用」すると学習します

では、なんのために活用するのでしょうか

その実態は、動詞を活用させることにより、「動詞」そのものや「文全体」を「名詞化」「形容詞化」「副詞化」させることです（「名形副化」と略します）

日本語の動詞の活用ではわかりにくいですが、例えば、「走る」という動詞が活用し、「走り」という連用形は「名詞化」し（君の走りはイイね）、「走る」という連体形は「形容詞化」しているのです（走る亀）

「走りながら」「走るとき」「走れば」等は副詞化です

そして、英語の「動詞」の「活用」には、

- ①「不定詞」(「t o d o」)
 - ②「能動分詞」(「～i n g・d o i n g」) (「現在分詞」といわれている)
 - ③「受動分詞」(「～e d」) (「過去分詞」といわれている)
 - ④「完了分詞」(「～e d」) (「過去分詞」といわれている)
- というような4種類の「活用」があります

- ① の「不定詞」は、ご存じの通り、「名詞的用法」「形容詞的用法」「副詞的用法」の3種の展開をしております
- ② の「～i n g形」は「能動事態・状態・状況」を表し、「名詞化」「形容詞化」「副詞化」しています
従来、それぞれ、〈動名詞〉〈進行形〉〈分詞構文〉と呼ばれていましたが、そのように分断する必要はなく、「不定詞」と同様にまとめて考えましょう
本書では、「能動活用」「能動分詞」と考えます
- ③ の「～e d形」は「受動状態・状況」を表し、「形容詞化」「副詞化」しています
従来、〈受動態〉〈分詞構文〉と呼ばれているものですが、本書では、「受動活用」「受動分詞」と考えます
- ④ の「～e d形」は、「完了状態」を表し、「形容詞化」します
本書では、「完了活用」「完了分詞」と考えます

そうすると、「～e d形」は、動詞の同じカタチの活用形態に「過去形態」「受動形態」「完了形態」が同居していますが、日本語の「れる・られる（受動・可能・尊敬・自発）」のように同一の形態のなかに様々な「状態・状況」が同居していると考えます（あとは、詞の位置や前後関係等で確定されます）

（詳しくは、第10講以下で）

第02講 『文。』に「文役」、「語句節」と「品詞」

本講では、

① 「基本3『文。』」の理解と「文役」の認識（「動詞」の観点からは「基本3種」）

② 「構成4品詞」の確実な認識と深い理解

を目指します（ここが、我慢の「基本3『文。』」の認識です、馬鹿にしないでください！）

I 『文。』の種類

『文。』の理解としては、まずは「基本的な3『文。』」の完全理解からはじめましょう

「基本3『文。』」

- ① 「何(主役)」が、「どうする」。(「主役」の「自分だけの動作」をあらわします)
- ②A 「何(主役)」が、「何」だ。(「主役」の「職業・地位・内容」をあらわします)
- ②B 「何(主役)」が、「どんな」だ。(「主役」の「性質・状態」をあらわします)
- ② 「何(主役)」が、「何」を、「どうする」。(「主役」の「他者を巻き込む動作」をあらわします)

『文。』には、基本的に「3『文。』」しかありませんといいながら、4種ありますが、②のA②Bの違い、すなわち、Aの「名詞による言い換え」と、Bの「形容詞による状態説明」の違いは読解上大変重要で、本来的には、「基本4『文。』」というべきでしょう

『文。』というものは、「動作」をあらわす「単語」すなわち「動詞」という「品詞」に支配されていて、それにより、「語順」があらかじめ慣習的に決まっているので、「作文者」は、その「ルール」に従って、「単語」を並べていくのです

『文。』は「(おもちゃの)回送貨物列車」のようなイメージで考えてください
作『文。』は、「動詞」を司令塔として慣習的に決まっている規則に従って並んでいる「空の貨物車」があるところに、作文者が伝えたい内容に応じて、必要な「単語(句節)」を的確に据えていくようなものです

ここから、厳格な「ルール」「規則性」をもった『文。』の「構造」をみていきます
細かい「ルール」はいったん措いて、「根本的なルール」を認識・理解し覚えないと、今後の積み上げが不能となり、あとが崩れ去るので注意してください

では、『文。』をつくっている「空の貨物車両」と「語順」についてみていきましょう

「『文。』の中心・主体」は「主役」で、脇に「補役」「目的役」

『文。』をつくっている「空の貨物車両」のうち、≪「何」が≫にあたる「『文。』の中心・主体」の部分「主役」と本書ではいいます（≪主語≫では狭小ですね）

それ以外以降の部分には、「主役」を補佐する「補役」と主役の相手役の「目的役」がありますね（≪補語≫≪目的語≫では狭小ですね）

『文。』をつくっているこれらの「空の貨物車両」には、それぞれ名称があります

①	主 部	述 部
	「何」が、	「どうする」。
貨車の名称	主 役	自動詞

例文 「タロー」が、「走る」。

②A	主 部	述 部
	「何」が、	「何」だ。
貨車の名称	主 役	補 役（「だ」「です」が自動詞に相当する）

例文 「タロー」が、「キャプテン」だ。

②B	主 部	述 部
	「何」が、	「どんな」だ。
貨車の名称	主 役	補 役（「だ」「です」が自動詞に相当する）

例文 「タロー」が、「おだやか」だ。 「タロー」は、「やさしい」です。

③	主 部	述 部	
	「何」が、	「何」を、	「どうする」。
貨車の名称	主 役	目的役	他動詞

例文 「タロー」が、「ボール」を「蹴る」。

『文。』の「空の貨物車両」の名称としては、「主役」「自動詞」「他動詞」「目的役」「補役」の5種しかありません

これらは、『文。』の中での「役割」を示しています

本書では、これらの総称を、『文。』中の「役割」ということで「文役」と呼びます

≪「貨車」＝「文役」≫です

「補役」とは、《「主役」を「補って」説明する「役割」》という意味です

「目的役」とは、《「動作」の「目的・対象物」を示す「役割」》を意味します

系念 禾尔	『文。』中の役割の呼称
文役 『文。』中での「役割」 『文。』中の「空の貨物車両」	主 役
	自動詞
	他動詞
	目的語
	補 役

「文役」は、『文。』中での「役割」であることをしっかり認識・理解してください

Ⅱ 「文役」に「語句節」と「品詞」

『文。』の中で、規則的に並んでいる「空貨車」すなわち「文役」には、配置できる「語句節」「品詞」が本来的に決まっています（以下の表を参照してください）

「語句節」は、その「性質」に応じて、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」などと、いくつかの種類に分類されています（この分類のグループ名の総称が「品詞」です）
（「動詞」と一括せずに、常に「自動詞」と「他動詞」に「厳格区別」しましょう）

『文。』の「構造」に関する場合、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」の4品詞を考えれば十分です（この「構成4品詞」略して「名形自他」をしっかり認識してください）

《「語句節」の「性質」に着目した分類の「総称」》を「品詞」といいます
《『文。』中の「役割」》が「文役」です
「語句節の性質による分類＝品詞」「文中の役割＝文役」を確実に理解してください

次は、どの「品詞」がどんな「文役」になれるかの理解です

「名詞」 → 「主役」・「目的役」・「補役」になれる
「形容詞」 → 「補役」になれる ……というだけのことです

では、「文役」と「品詞」の関係を確認します

①	主 部	述 部
	「何」が、	「どうする」。
文役	主 役	自動詞
品詞	名 詞	自動詞

②A	主 部	述 部
	「何」が、	「何」だ。
文役	主 役	補 役
品詞	名 詞	名 詞

②B	主 部	述 部
	「何」が、	「どんな」だ。
文役	主 役	補 役
品詞	名 詞	形容詞

③	主 部	述 部	
	「何」が、	「何」を、	「どうする」。
文役	主 役	目的役	他動詞
品詞	名 詞	名 詞	他動詞

「品詞」は、「語句節」の「性質」であることをしっかり認識・理解してください

「補役」には、②A「何だ」という「名詞補役」と、②B「どんなだ」という「形容詞補役」の2種類あることに注意してください

名詞補役（何だ）②A	「主役」の「職業・地位・内容」をあらわす
形容詞補役（どんなだ）②B	「主役」の「状態・性質」をあらわす

②Aは「名補」②Bは「形補」と、本書では略称します

①～③のような『文。』の「形態（型）」は、「作文者」が「どんなことをどう伝えたい」のかということから選択された「自動詞」もしくは「他動詞」によって支配されていることを確実に認識してください（ある意味、「動詞」は影の支配者なんですね）

「文役」と「品詞」のまとめ

文 役	品 詞
主 役	名 詞
目的役	名 詞
補 役	名 詞・形容詞
自動詞（「述語動詞」）	自動詞
他動詞（「述語動詞」）	他動詞

『文。』中での呼び方として、「述語動詞」という場合もあります

「構成要素」と「構造把握」

「文役」は『文。』中の「役割」の総称ですが、『文。』をどうつくっているのかという「組成」の観点からは、『文。』の「構成要素」と呼ぶこともできます

≪「文役」＝「構成要素」≫と考えてください

『文。』の「構成要素」とは、『文。』をつくる「必須の要素」ということです
また、『文。』中の役割（「文役」）を確定していくことを「構造把握」をいいます

「文役」

（ ＝

「構成要素」

）

「文役」とは、『文。』の「ルール」に従った、『文。』中の「役割」をあらわす総称で、本書では、『文。』を「構成」する「空の貨物車両」と例えてきました
「主役」「自動詞」「他動詞」「目的語」「補役」の5種類のみしかありません

「品詞」

「語句節」の性質に着目した分類の視点からの「総称」で、主に「名形自他＋副」

「構成4品詞」

『文。』の「文役（構成要素）」には、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」の4種しかねない

「初歩の段階」では、「英文」中の「品詞」と「文役」を丁寧に確定させていくのが、「英文読解」を上達させる「確実なルート」です

これを、「品詞分解（作業）」といいます、「構造把握」ともいうのです

「文役」は「主役」「自動詞」「他動詞」「目的役」「補役」で、『文。』の「組成」の視点から見ると「構成要素」であり、本書では、まとめて「主自他目補」「主目補自他」「主目補」等と略して表記したりします

それでは、「文役」と「品詞」の関係について、「英文」で見てみましょう

①	主 部	述 部	
	「何」が、	「どうする」。	
英文	T a r o	r u n s .	
文役	主 役	自動詞	
品詞	名 詞	自動詞	

②A	主 部	述 部	
	「何」が、	だ（です）	「何」
英文	T a r o	i s	c a p t a i n .
文役	主 役	自動詞	補 役
品詞	名 詞	自動詞	名 詞

②B	主 部	述 部	
	「何」が、	だ（です）	「どんな」
英文	T a r o	i s	k i n d .
文役	主 役	自動詞	補 役
品詞	名 詞	自動詞	形容詞

③	主 部	述 部	
	「何」が、	「どうする」。	「何」を、
英文	T a r o	k i c k s	a b a l l .
文役	主 役	他動詞	目的役
品詞	名 詞	他動詞	名 詞

『文。』の「イメージ」

『文。』という「舞台」の上で、「名詞」「形容詞」「自動詞」「他動詞」という「俳優」陣が、「プロデューサー（作文者）」に選ばれて、「主役」「自動詞」「他動詞」「補役」「目的役」という「配役」について、様々な現事象を演じて伝達しているのです
第05講で学習しますが、舞台の「場面状況」「背景」が「副詞」なのです
「場面状況」「背景」が「配役外」「構成要素外」なのはわかりますね

本講の習得内容のまとめです

【 『文。』 の解析・読解の視点 】

- ① 「語句節」が『文。』中でどんな役割（「文役」）をしているのか（「文役」の確定）
- ② 「文役」には、どんな「品詞」が据えられているのか（「品詞」の確定）

『文。』の「構造把握」には、①と②の往復思考が大切なのです（「品詞分解（作業）」）

「名詞補役」は深すぎる・・・

「名詞主役」を「名詞補役」で「言い換える」ことは、恐ろしいほど深いものです

「職業・地位・内容」のうち「内容」と分類されるものが、怖いのです

「名詞」につきましては、「第〇七講」以下で、追々触れていきますが、様々な「名詞」（第15講参照）で、「主題・主役」を「言い換える」のです

「名詞」で「名詞」を説明するのは至難の業なのです（「形容詞」で「説明」するのは困難さのレベルが違います）

この「言い換え」は、「現代文」の訓練で鍛えるしかないでしょう

次講では、「自動詞」と「他動詞」について、詳しくみていきましょう

第03講 厳格区別、「自動詞」と「他動詞」

「英文法」の学習において、「名詞の認識」「形容詞の理解」「自動詞と他動詞の厳格区別」「副詞の疎外」が、はじめの「関門」です

これらを乗り越えれば、けっこう見えてくるものがあります

また、「be 動詞」と「一般動詞」の区別なんて、ほとんど意味がありません
（「be 動詞」は「特殊な自動詞」というだけのことです）

本講では、「自動詞」と「他動詞」の違いを、「認識・理解」します

自動詞	「主役」の「動作」のうち、「他者」を巻き込まない、「主役」単独の一人だけの「動作」をあらわす
他動詞	「主役」の「動作」のうち、「他者（対象物）」を「巻き込む動作」をあらわす

I 「自動詞」は2種ある

「自動詞」には、①「動詞」だけで意味が完結し「補役」の助けを必要としない「自立動詞」と、②「補役」により「主役」を説明・補完する「補完動詞」の2種があります（従来の完全自動詞だ不完全自動詞だという空疎な名称には言及する価値もありません）

これら、「自立動詞」と「補完動詞」の区別を確実に認識しなければなりません

①「自立動詞」は「主役の単純な動作」であるのに対し、②「補完動詞」は「主役」の「職業・地位・内容」を④「名詞補役」で、「状態・性質」を⑤「形容詞補役」であらわすという大きな違い、すなわち、①②の「補役の有無」や、④「名詞補役」か⑤「形容詞補役」かという重大な特徴を確実に認識・理解する必要があるのです

「自動詞」のまとめ

①	自立動詞	「主役」の単純な「動作」をあらわす 「補役」は必要ない
②④	「補完動詞」＋「名詞補役」	「主役」の「職業・地位・内容」をあらわす
②⑤	「補完動詞」＋「形容詞補役」	「主役」の「状態・性質」をあらわす

本書では、「自立動詞」の『文。』を「自立文型」と呼び、「補完動詞」の『文。』を「補完文型」と呼びます（従来の第Ⅰ文型だとか番号を振って何の効用があるのでしょうか）
（ついでに、略しまして、④は「名補文型」、⑤は「形補文型」と呼ぶべきでしょうね）

①「自立動詞」の例文です

A g h o s t i s .	「幽霊は存在する。」
T a r o r u n s .	「タローは走る。」
H a n a k o s l e e p s .	「ハナコは眠る。」

②「補完動詞」の例文です

① T a r o i s c a p t a i n . 「タローはキャプテンです。」
名詞補役（職業・地位）

② T a r o i s k i n d . 「タローはやさしいです。」
形容詞補役（性質・状態）

ここで、「remain」という単語を辞書で引いてみて、「補完文型」を確実に実感・認識してください

II 「他動詞」には「対象物」が伴う

「他動詞」には、「関渉動詞」「授与動詞」「拈術動詞」の3種がありますが、本講の段階では、「関渉（かんしょう）動詞」のみを確実に認識・理解してください

「授与動詞」は第18講で、「拈術（かくじゅつ）動詞」は第19講で学習します

「他動詞」は、「主役」が「他者（対象物）」に「働きかける動作」をあらわし、その中で、「対象物・目的物」＝「目的役」がひとつで、最も基本的な「他動詞」を「関渉動詞」と本書では呼び、「関渉動詞」が使われている『文。』を「関渉文型」と呼びます（一般には、第Ⅲ文型といいますが、番号呼称には辟易ですね）

T a r o <u>k i c k s</u> <u>a b a l l</u> .	「タローはボールを蹴る。」
関渉動詞	目的役

「他動詞」は、「動作の対象」としての「他者」「対象物」「目的物」、『文。』の「文役」でいう「目的役」が必要なことをしっかり認識・理解してください

次講では、「品詞」の理解のための先陣ともいうべき、「形容詞」についてみましょう

第04講 「品詞」の理解の関門「形容詞」

「品詞」の本当の理解は、「形容詞」の認識・理解と親しみからと、「副詞」の認識・理解と排除・疎外からはじまりますと言っても過言ではないでしょう
まず本講では、「形容詞」を認識・理解し、親しみを感じられるようになりましょう

はじめに、《「形容詞」は、「名詞」の「状態・性質」を示す「品詞」である》という大前提を認識・確認してください

ここで、「形容詞」の活躍する場は、Ⅰ「名詞修飾」と、Ⅱ「補役（主語修飾）」の2つあることを覚えてください（Ⅰ直接密着的な活躍か、Ⅱ『文。』中での間接説明補完的活躍かの違いを認識してください）

Ⅰ	名詞を修飾する 名詞修飾用法 (限定用法)	主に「名詞」の前に置かれて、①「名詞」の「状態・性質」（「名詞修飾」）を示し、②結果的に、「名詞」の範囲を限定することになる（「名修形」と略します）
Ⅱ	「補役」になる 補役用法 (叙述用法)	「自動詞」の後に置かれて、「主役」の「性質・状態」を「説明」する（「形容詞補役」で「形補」と略します）（『文。』の「構成要素」となっていることが重要）

「名詞修飾用法」の「形容詞」を「役外装飾族」と命名します（詳しくは後述）

Ⅰ 「名詞修飾用法」

I k n o w a c l e v e r b o y .
他動詞 **名修形** **中心名詞・中心目的語**

- ①「賢い」というのは、「少年」（名詞）の「状態・性質」を示しています
- ②「少年」が、「賢い」という「形容詞」によって、数多くいるだたの「少年」から、少数の「賢い少年」に「限定」されています

「限定」されるというのは、多数存在する「名詞」の中から、「形容詞」により、範囲が狭められ、話題になっている「名詞」が「少数化」「特定化に接近」することです

『文。』中での「名詞修飾形容詞」の行方・運命

ここで、重要なのは、「名詞修飾形容詞」の「運命」です

上記の例文では、『文。』の構成上、「b o y」が「目的語」で「構成要素」ですが、「c l e v e r」は『文。』の「構成要素」ではなく、「b o y」を「修飾」しつつ、構成上は「b o y」に「吸収」され「消滅」していくのです

そして、「構成要素」で「目的役」となっている「b o y」を「中心名詞」「中心目的語」と呼びます（「主役」の場合は「中心主語」で、「補役」の場合は「中心補語」です）（「中心名詞」は「中心主目補」の総称です）

このように、「名詞修飾形容詞」は「中心名詞」を修飾し、「中心名詞」に「吸収され・消滅する」運命にあり、「構成要素」とは無関係なのです

「名詞修飾形容詞」を「役外修飾族」と命名し分類することは後述します

「名語」と「名句」

a	h a n d s o m e	c l e v e r	b o y
名修形	名修形	名修形	名語（中心名詞）

これらは、4つの「単語」で構成されていますが、4つの「単語」を独立させて意味をとっても何の効果効用もありません

「4単語」で、ひとつの「意味のあるまとまり」としてとらえるのが通常です
そして、この「まとまり」を、「句」といいます（「名句」）

この「まとまり」が『文。』中にあったとすれば、真に「構成要素」として働くのは、「中心名詞」の「b o y」だけで、その他の3つの「単語（形容詞・形容語）」は、「衣装やアクセサリー」にすぎず、『文。』中では、構造上は「中心名詞」に「寄生」しているだけで、役割的には「中心名詞」に「吸収され消滅」してしまうのです
このような、「中心名詞」を核とし、様々な「（名修）形容詞」を伴った「意味のあるまとまり」を「名句」といいます（「定義」）

「b o y」は「1単語」なので「名語」ですが、「a b o y」は「名句」なのです
このように、《「複数の単語の意味のあるまとまり（集合体）」》を「句」といいます（ただの「群衆」とは異なる有機的集合体すなわち「社団」的なものを認識してください）（ここで・・・、「社団」・・・、わからない語は逐一きちんと辞書で調べるクセをつけてくださいよ）
他には、「形容句」と「副句」が重要です（第6講で学習します）

『文。』の「構成要素」の観点からのまとめ

I	名詞修飾用法	「中心名詞」を修飾し、吸収され、『文。』の「構成要素」ではなく、構造上は役に立っていない
II	補役用法	『文。』中で、「補役」という「構成要素」として、構造上、重要な働きをしている

「役外装飾族」（役者の衣装やアクセサリーのようなものです）

「名詞修飾形容詞」は、「文役・構成要素」ではなく「配役外」で、中心となる「名詞を装飾」するに過ぎない存在なので、本書では、「役外装飾族」と名付けます
「役者（中心名詞）」と「衣装・アクセサリー（名詞修飾形容詞）」の関係ですね

II 「補役用法」

① That boy is clever .
自 形容補語

もう、説明はいりませんね

「clever」が、『文。』中で、「形容詞補役」として、「重責」を果たしています

② Taro is a clever boy .
名修形 名修形 中心補語

名句で補役（名補句）

この例文では、文法的・構造的には、「タロー」が「少年」だ、という「中心補語」に重点がおかれた表現となっています（文脈的意味では、「賢い」ということが重要かもしれませんが・・・）

「clever」は「アクセサリー」に過ぎませんので、「clever」を取っても、「Taro is a boy .」で、「補完文型（名補文型）」であることに変わりはありません

しかし、①の『文。』で、「clever」を取ると、「Taro is .」となり、「タローは存在する」と、「自立文型」になってしまいます

取り去ると『文。』のかたちが変わってしまうような位置や働きにある「語句節」を「文役」や「構成要素」というのです

それにしても、「形容詞」という呼称はわかりにくいかもしれませんね
名前を示す「品詞」が「名詞」なら、「名詞」の「状態」を示す品詞は、本来「**状態詞**」とでもいうべきでしょうか（実態的には「**評価詞**」ともいえます）（以下の「参考」参照）

「彼は病気だ」「ヤツは馬鹿だ」という場合、「病気だ」「馬鹿だ」というのは、「状態・性質」を示す「形容詞補役」なのが認識・理解できるようになりましたか

「名詞補役」と解すると、「職業・地位」や「モノ・コト」的に扱うことになり、「病気」「馬鹿」という「モノ・コト」とまるで着ぐるみ扱いのようになってしまいますよ

次講では、「英文読解」の「邪魔者」である「副詞」についてみていきます

合言葉は、「邪魔者は排除する」です

でも、「場面状況」を設定する、縁の下や場外の重要な担当者・裏方なんですね

.....

本講の補足確認点

本講の段階では、「補役」に関しては、「主語」を説明する「主格補役」のみを考え、「目的役」を説明する「目的格補役」については視野に入れておりません（第19講参照）

第05講 まずは、「副詞」を「排除」すべし

「形容詞」を理解し、「副詞」が解れば、「品詞」の理解はおおよそ終わったも同然と言っても過言ではないでしょう（あとは、どんどんみえてきます）

「副詞」は、はじめのうちは暗記することが多く大変に思えますが、覚えてしまえば「英文読解」が非常に楽になりますので、しっかり認識・理解・暗記してください
そして、《「副詞」は、『文。』の「構造把握」のために「排除」する》が合言葉です

本講では、「副詞」の正体について、詳しく見ていきます（正体を知り排除するのです）
今まで見てきた「名詞」「自動詞」「他動詞」「形容詞」は、「文役・構成要素」でしたが、「副詞」は「構成要素」ではありません（「構成要素」外の邪魔者なのです）
ですから、「構造把握」のために、「副詞」（敵）を知り「ハブ」くのです

また、『文。』全体の意味の観点からは、実態的には、《「副詞」は、『文。』の「場面状況」を設定している》ということを認識・理解してください（「舞台背景」の設定）

「役外状況族」

「副詞」は、「文役・構成要素」ではなく、外から『文。』の場面状況を設定している」という意味で、「役外状況族」と本書では呼びます（舞台の背景といえます）
本来、「副詞」というわかりにくい命名よりは、「状況詞」とでもいうべきものです

まずは、「副詞」という名前がわかりにくいですね

「副える」ということですが、何に副えるのでしょうか

まずは、「形容詞」「動詞」『文。』にそえているということを認識してください

実態は、主語自体の「状態」は「形容詞」、主語の外部環境の「状況」は「副詞」と理解してください（「形容詞」は「衣装・アクセサリ」、「副詞」は「舞台背景」ですね）
従いまして、「形容詞」は「状態詞」、「副詞」は「状況詞」なのです

まずは、「副詞」の「役割」と「きまり」を具体的にみていきます

「副詞三原則」

「副詞三原則」というものがあり、まずは、これを覚えなければなりません

原則Ⅰ <<「副詞」の「性質」>>

原則Ⅱ <<「副詞」の「意味内容」>>

原則Ⅲ <<「副詞」の「修飾先」>>

「完全暗記」だ！ ガンバロウ！！

原則 I

「副詞」の「性質」

- 1、「文役」「構成要素」「主自他目補」にはなれない
- 2、『文。』のどこにでも置かれる（文頭・文中・文末）
 - 3、省略されても意味が通ることが多く、省略されやすい
 - 4、意味の強い「副詞」がくると、「倒置」が起きやすい

3と4は、本講の段階では、重要性が低いので、触れません
本講では、「2、」について見ていきます

He met that girl .

「時をあらわす副詞」の「yesterday」は、この英文の、どこにでも置けます

(① 頭,) He (, ②文中・挿入,) met (, ③,) that (, ④,) girl (, ⑤文末).

①の「文頭」（カンマを後ろにつけることが多い）、⑤の「文末」（カンマを前につけることがある）は当然のことながら、②の「文中」（「挿入」といい、前後にカンマを置くことが多い）も可能であります。④は、「that girl」という「名句」の「まとめり」の中に「挿入」するのは意味が不明瞭となり、「句」や『文。』を完全に分断してしまうので、通常はありえないでしょう

③は、「他動詞」と「目的語」の間であり、④ほどの緊密性はないので、可能ではあります。かなり修辭的表現を狙ったものとなるでしょう

ここでは、「カンマ（コンマ）」というものに注目しておいてください

「カンマ」は、『文。』の「構造」をわかりやすくしてくれているものなのです
多くは、「副詞」との絡みで使われます（「同格（第07講参照）」でも使われます）
すなわち、「副詞」があることを明示してくれているのです

「挿入」で「カンマ」がないとわかりにくいときがあるので、「カンマ」で「副詞挿入」を明示してくれているのです

特に、「挿入」の場合、両端に「カンマ」があることに注意してください

「カンマ」から「カンマ」は「()」で括って、「副詞挿入」として「排除」して、「構造把握」をしてください

He met (, yesterday,) that girl .

「挿入」の「yesterday」は「()」で括り、「排除」しましょう

原則Ⅱ

「副詞」の「意味内容」

「副詞」の「意味内容」としては、

①「時」②「場所」③「程度」④「頻度」⑤「目的」⑥「手段」⑦「理由」⑧「条件」⑨「譲歩」⑩「否定」⑪「付帯状況」⑫「結果」⑬「その他」
など、様々あります

①～⑫は「完全暗記」するのが得策です

覚えるのは、はじめのうちは大変ですが、日常生活で意識したり、英文を注意して見ていれば、すぐに慣れます

では、「疑問副詞」を利用した、次の表を参考にして、「副詞」のイメージをつくりあげてください

簡略な意味	疑問副詞	日本語での意味内容	英語の語句節例
①時（いつ）	w h e n	～のとき	today tomorrow
②場所（どこで）	w h e r e	～のところで	here there
③程度（どのくらい）	h o w	どのくらい	hard
④頻度（どのくらい）	h o w ～	どのくらい	often sometimes
⑤目的（なんのために）		～のために	不定詞句、so that 節
⑥手段（どうやって）	h o w	～で	by 語句、with 語句
⑦理由（なぜ）	w h y	なぜなら	because 節
⑧条件（もし～なら）		（もし）～なら	if 節
⑨譲歩（～だけれども）		～だけれども	though 節

⑩「否定」の「n o t」も「副詞」です

以下の「否定の副詞」も覚えてください（「n o t」と同時に使うことはありません）

⑩否定 4 単語

h a r d l y	ほとんど～ない
s c a r c e l y	
r a r e l y	めったに～ない
s e l d o m	

「n o l o n g e r（もはや～ない）」等は、「群否定副詞」と考えてください

⑪「付帯状況」は、本講では扱いません（別巻でとりあげる予定です）

⑫「結果」は「不定詞」の講で説明します（第11講参照）

原則Ⅲ

「副詞」の「修飾先」

「形容詞」は「名詞」を「修飾・説明」するのに対して、

「副詞」は、①「動詞」、②「形容詞」、③「副詞」、④「『文。』全体」を「修飾」します

① He runs fast. (速く走る)

自 ← 副

② He is very fast. (とても速い)

副 → 形補

③ He runs very fast. (とても速く)

副 → 副

④ Truly, he runs fast. (本当に、)

副 → 『文。』

「副詞」は、構造上は、「動詞」「形節詞」「副詞」「『文。』全体」に吸収され・消滅する「文役外」「役外族」なのがわかりますよね
「役外状況族」という命名が実感できますでしょうか

ちなみに、

本書では、「間投詞」は、感情をあらわす、独立的な「副詞」と考えます
「oh」「thanks」など

「副詞」は「動・形・副・『文。』」に「副える」というところからの命名でしょうが、いまひとつわかりにくいですね

分析的視点からは、「形容詞」は「中心名詞」やその他の「名詞」の状態を示す「状態詞」と命名されるべきで、「副詞」は「中心名詞」やその他の「名詞」の外の状況を示したり、「動作（動詞）」の状況や「形容詞」の状況を示す「状況詞」と命名されるものであるべきことを実感できたでしょうか

ここまでは、「単語」で、「品詞」（主に「名詞」「形容詞」「副詞」）、「文役」「構成要素」（「主役」「目的役」「補役」）を考えてきましたが、これからは、「意味のある大きなまとまり」すなわち「句」と「節」で、大きな「名詞」・大きな「形容詞」・大きな「副詞」を見ていきます（大型の「名形副」）

次講で、「句」からはじめましょう